

希望を求めて

AMD A 30年

②

開いた国際会議に、タンラさんが教える医学生が参加。だが、途中で体調を崩した。

菅波さんの診察を受け

ねた。菅波さんはAMD Aの構想を熱心に語り、2人は意気投合。その場でインドネシア支部の開設を決めた。

以来、タンラさんはさまざまな現場で協力してきた。92年、インドネシア・フロレス島の地震と津波の被災地には、AMD A本部の依頼を待た



AMD A 多国籍医師団

「アジア多国籍医師団」として、

1993年にネパールやフィリピンなどの医師らと結成。構成員はAMD A 海外支部として、現在では南米、アフリカ、欧州などにも広がる。支援活動では、現地の支部が指揮をとる「ローカルイニシアチブ」を重視。支援に入ったことを機に、その国に支部を設立することもある。

世界の災害地や紛争地で活動する医療NGO「AMD A」（北区伊福町3）の大きな特徴は、30カ国の海外支部から成る「多国籍医師団」だ。医師仲間のネットワークは素早い支援に役立つだけではない。土地の習慣を熟知した医師がいることで、被災者に寄り添った支援ができる。なぜ、こんなネットワークが作られたのか。答えは、AMD A創立者の菅波茂さん（67）＝マレーシア事務所（首都クアラルンプール）勤務＝が顔と顔を合わせ

た学生は帰国後、タンラさんに「菅波さんとはとても親切で誠実だった」と話した。翌86年、来日

の出会い、AMD A 創立当初の1985年にまでさかのぼる。当時、アジアと日本の医学生の交流のために菅波さんら

話一本で緊急救援チームとしていた菅波さんは、医学生と一緒にカンボジア

難民支援のため難民キャンプを目指した。だが、現地の受け皿がなく、活動できないまま帰国を余儀なくされた。「受け皿がないなら、作ればいい」。海外に医師仲間を作るため、翌80年から国際会議を企画した。その成果が、タンラさんら多国籍医師団だ。

信頼でつながる協力者

ずいといち早く駆けつけ、1万人以上の被災者を診察した。

を派遣してくれる。「戦争や災害で疎外された人たちに目を向けるAMD Aの姿勢に共感している」とタンラさん。「多国籍医師団があれば、迅速に、効果的に災害を切り抜けることができると自負する。」

フィリピン・マニラで今年3月にあった国際会議で、菅波さんらAMD A本部と海外支部のメンバーは顔を合わせた。親しげな笑顔で、AMD Aの今後を熱心に語り合う。国境や宗教を超えて力を合わせる、力強い仲間だ。【五十嵐朋子】

インドネシア支部長のタンラさん



今年2月、インドネシア・マリノで農業支援をしたAMD Aの菅波茂さん(左)とフスニ・タンラさん(中央)＝タンラさん提供



AMD Aインドネシア支部(マカッサル)

り抜けることができると自負する。」菅波さんにとって、多国籍医師団の原点は79年にある。岡山の病院に勤務

最も古い海外支部の一つ、インドネシア支部。支部長で同国マカッサルの麻酔科医、フスニ・タンラさん(71)と菅波さん

多国籍医師団